

の形や数の異常についての記載が多いが、われわれの観察では、ミトコンドリアの腫大が普遍的病変として認められた。この変化は過剰甲状腺ホルモンの直接的影響か、あるいは心不全や不整脈にもとづく二次的病変か区別はむづかしいが、200例以上に及ぶ各種の病的筋病変の電顕像観察を通じての経験から、前者の可能性を示唆する病変と考え度い。

17. 虫垂におけるリンパ濾胞肥大と術前疼痛に関する研究

(外科) 太田 英樹

(中検病理) 平山 章

1886年 Fitzにより初めて確立された虫垂炎は、われわれ外科医が最も多く遭遇する疾患であり、今日まで内外多数の虫垂炎に関する研究業績の発表を見るが、かなり未解決の部分が残されているようである。

近年、輸液、抗生剤、麻酔等の発達により、治療成績の著しい向上をみるが、一方、手術が安易に行なわれている傾向にあることも否定できず、臨床上、明らかに虫垂炎の症状を示しながら、切除虫垂においては肉眼的変化に乏しいのみならず、病理組織学的検査においても、リンパ濾胞の肥大をみるのみで炎症像の欠如をみるものが、かなりの頻度で見うけられる。

演者らは虫垂に炎症のなかつた例についてはリンパ濾胞肥大と疼痛の関係を追究した。

当大学外科における虫垂切除例 104例、および対照例として正常虫垂19例について、病理組織学的検査を行うと、リンパ濾胞肥大型、リンパ濾胞肥大型+炎症型および炎症型に分類できる。更にこのうち、リンパ濾胞肥大型について疼痛との関連性をみるために、リンパ濾胞肥大型25例について、粘膜層、粘膜下層、リンパ組織、リンパ濾胞、および筋層についての各組織間の面積比を算出した。その結果、正常に比してほとんど全ての粘膜層の面積比が増大していた。特に粘膜層の面積比の著明な増大の例には Kot, Kotstein を含まない例が多くみられた。内外を問わず諸家の研究によれば、非炎症虫垂切除例の疼痛の原因には、リンパ濾胞肥大による管腔内圧の上昇をあげている。しかし演者らの研究によれば、非炎症虫垂例の疼痛の原因は、主として粘膜層の肥大と又は Kotstein による管腔内圧の上昇にあるものと考えられる。

18. Forestier 病に由来した嚥下障害の1治験例

(耳鼻咽喉科)

岩嶋恵美子・菊池 尚子・○白幡裕子

嚥下困難を主訴として来院し、手術的療法により症状

を消退せしめた興味ある1症例を経験したので報告した。患者は72才の男性で、4年前から固形物が食道にかえるような感じを覚え始め、昭和48年10月より嚥下障害高度となり、流動物の経口摂取もほとんど不可能となった。患者は消化器系統の精密検査を望み当院消化器病センターを受診し、食道検査のため担当医が Flexible Fiberscope を挿入しようとしたが、全く挿入不能のため当科へ紹介されてきた。当科初診時の間接喉頭鏡所見では、下咽頭後壁の膨隆、食道入口部・梨状陥凹に唾液の貯留が著しく、粘膜所見を充分把握できなかつたが、音声には異常はなかつた。白血球数の軽度増多を示したほかには、血液・尿・血清化学・ワッセルマン反応・心電図などの検査で異常なし。頸椎のX線像では、前縦走靱帯の化骨がみられ、第5・6頸椎前面の上下線は嚙状に隆起して骨堤を形成していた。食道造影では圧排像がみられた。11月15日全身麻酔下に左胸鎖乳突筋前縁に皮切をおき、胸鎖乳突筋、頸動脈を側方に圧排し、甲状軟骨の後面で食道を椎体から遊離させると、第5・6椎体関節に達した。骨膜を切開し、整形外科用リュールの骨鉗子で嚙状に突出した骨隆起を鉗除して、平坦にした。手術的療法により第5・6椎体前面に突出した直径3cm大、半球状骨隆起を除去することによつて、患者の症状は全く消退し、術後は固形物も苦痛なく嚥下できるようになった。本症例の文献的考察を行なつたが、この嚥下障害は、嚥下運動によつて骨隆起が食道壁を刺激することにより惹起された食道炎によるものと考えた。

19. 進行性筋ジストロフィー症に関する研究—特に女性の筋ジストロフィー症について—

(第二病院内科)

○富田 崇敏・中野 義澄・目黒 雅俊・清水 広三・高宮 将子・安孫子 惇・渡辺 晴雄

女性の筋ジストロフィー症に関し、Duchenne 型と一致する臨床症状や経過を示す症例がしばしば報告されている。古くは Duchenne (1868) の最初の論文の中に2例の女兒の記載があり、以後 Levison (1951) の孤発2少女例、Klopfer・Talley (1958) の3例、Dubowitz (1960) の姉妹例等の他、Johnston (1964) は“severe muscular dystrophy in girls”と題して11例を報告している。しかしこれらの症例は、臨床的に Duchenne 型と類似はしているが、autosomal recessive form に属すると解釈されるものが殆どである。一方、Turner 症候群の女性で Duchenne 型ジストロフィー症に罹患したという例は、現在まで Ferrier ら (1925) の2例にすぎない。更に